

シビアアクシデント時原子力発電所内線量評価システムの改良 - IE法によるビルドアップ係数の整備とQAD, G33両コードの深層透過問題への対応 -

Improvement of Dose Evaluation System for Employees at Severe Accident of Nuclear Power Plant - Development of Gamma-Ray Buildup Factors by Invariant Embedding Method and Application to Deep Penetration Problem by QAD Code and G33 Code -

恩田 隆司 (Takashi Onda)^{*} 吉田 至孝 (Yoshitaka Yoshida)^{*}
清水 彰直 (Akinao Shimizu)[†] 坂本 幸夫 (Yukio Sakamoto)[‡]

要約 著者らは原子力発電所のシビアアクシデント時における現場従業員の被ばく線量を評価するため、QADコードとG33コードを用いて直接線、スカイシャイン線を評価するシステムを開発した。現状のコードで使用されているガンマ線のビルドアップ係数は深い層に対する値が不足し、精度に問題があったため、ビルドアップ係数の改良を行った。計算にはIE (invariant embedding) 法を利用し、制動輻射線の現実的なモデルを導入して深さ300mfpまで拡張した。その結果、300mfpまで十分な精度で、従来のビルドアップ係数を大幅に改良することができた。加えて、改良されたビルドアップ係数を利用してGP (geometric progression) 式のフィッティングパラメータを算出した。実際に深層透過問題に適用するため、改良ビルドアップ係数およびGP式のフィッティングパラメータをQADコードとG33コードに導入した。

キーワード シビアアクシデント、被ばく線量評価、QAD、G33、ビルドアップ係数、IE法、GP式、深層透過

Abstract The authors developed the system that estimates direct line and skyshine using the QAD code and the G33 code in order to evaluate the radiation dose of employees at severe accident in a nuclear power plant. Since the gamma-ray buildup factors used presently is lacking in data of very deep region and there is a problem in accuracy, the buildup factors were improved. The data set of buildup factor was extended up to depths of 300mfp with the invariant embedding (IE) method and the realistic model for the effect of bremsstrahlung on the buildup factors. Consequently, it was shown that the buildup factors had sufficient accuracy to 300 mfp and the conventional data set of buildup factor had been improved considerably. Moreover, the parameters of geometric progression (GP) formula to the improved buildup factors were computed. In order to apply to a very deep penetration problem, the improved buildup factors and GP fitting parameters were introduced into the QAD code and the G33 code.

Keywords severe accident, dose evaluation, QAD, G33, buildup factor, invariant embedding method, geometric progression formula, very deep penetration

1. まえがき

原子力発電所におけるシビアアクシデントに対し、事業者は、1) アクシデントマネジメントの実施、2) 被災者の救助活動、3) 故障機器の復旧作業、4) 従業員避難誘導等を適切に行う必要がある。アクシデントマネジメントの実施により事故の拡大防止措置を講じるが、こうした活動を実施する場所の線量率は、事故状況により、大きく変化するので現場活動に先

立ち発電所構内の線量率を予測しておく必要がある。そこで著者らは、これまでにシビアアクシデント時における従業員の被ばく線量を評価するための線量評価システムを開発した⁽¹⁾⁻⁽³⁾。本線量評価システムでは、事故状況を踏まえた放射性物質の拡散状況を解析し、推定した放射線源と従業員が滞在する場所の間に存在する遮蔽壁等の設置状況から直接線およびスカイシャイン線線量率を求め、各滞在場所における滞在時間との積から被ばく線量を評価する。

* (株)原子力安全システム研究所 技術システム研究所

† 元(財)若狭湾エネルギー研究センター

‡ 日本原子力研究所

ここで、直接線量率計算には QAD-CGGP2R コード⁽⁴⁾（以下 QAD コードという）、スカイシャイン線量率計算には G33-GP2R コード⁽⁴⁾（以下 G33 コードという）を用いた。両コードは一般に公開されている。

QAD コードは点減衰核法を用いている。この点減衰核法は、線源から放出された光子群が一度も衝突せずに評価点に到達する線束による線量率に、遮蔽体内での散乱による増倍効果を表すビルドアップ係数を掛け合わせることにより線量率を算出する計算法である。一方 G33 コードは一回散乱法と呼ばれる簡易計算手法を用いている。この計算法は、線源から散乱点までを点減衰核法で計算し、散乱点から評価点までを散乱の物理公式で評価する。QAD コードと G33 コードは、モンテカルロ法や Sn 法などの計算手法と比較して計算速度が高速であり、同じく点減衰核法を用いている原子力発電所の設置許可申請計算に用いられる SPAN コード⁽⁵⁾や SCATTERING コード⁽⁶⁾と比較して同等の性能を有している。両コードに内蔵されているビルドアップ係数は、米国原子力学会（American Nuclear Society, ANS）の標準化委員会によって 26 種類の物質、0.015 から 15MeV の線源エネルギーについて深さ 40 mfp（平均自由行程、mean free path）まで求められたデータであり、今日の標準データとして広く利用されている（以下 ANS 標準データという）⁽⁷⁾。

しかしながら原子力発電所のような大きな体系の場合、40mfp を超える深さの遮蔽計算も必要とされるが、従来は便宜的に 40mfp でのビルドアップ係数で代用される⁽⁴⁾。これまでに、40mfp を超える深さでのビルドアップ係数を求めた例を見ると、Chibani がモンテカルロ法を使っていくつかの代表的な物質について 60mfp まで計算している⁽⁸⁾。清水は IE (invariant embedding) 法を使って 100mfp まで水、鉄、鉛について計算を行っている⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾。QAD コードおよび G33 コードに採用されている GP (geometric progression) 式⁽²⁰⁾と呼ばれるフィッティング式によってビルドアップ係数を補間する場合、40mfp から 60mfp まで外挿⁽⁴⁾することが可能となっている。しかしながら、透過距離や物質種類の面でまだ十分とは言えない。

一方、この ANS データは、銅以下の低 Z 核種では、断面積データ NBS29⁽¹²⁾を使ったモーメント法で計算されており、制動輻射線の効果は考慮されていない⁽⁷⁾。また、モリブデン以上の高 Z 核種では、断面積データ PHOTX⁽⁷⁾を使った PALLAS コード⁽¹⁴⁾で計算され、制動輻射線を簡易モデルで考慮しているために誤差

を指摘されている⁽¹⁵⁾。

そこで、本研究では、深い層におけるガンマ線遮蔽計算、シビアアクシデント時における従業員の被ばく線量評価の精度向上に資するため、上記の標準データの深さ、精度の問題を解決する新たなビルドアップ係数データセットの整備を行った。十分深い層までのデータを整備するには、モンテカルロ法による計算は十分なヒストリーを得るまでに時間がかかりすぎることから現実的に不可能であり、他の計算方法でも比較検証ができないため精度の確認ができない。そのため、100mfp までの実績があり、独自に精度の評価が可能である IE 法に基づく輸送計算コード^{(16)~(20)}を使用した。得られたビルドアップ係数データを実際に活用するため、QAD コードと G33 コードに反映させた。

2. 改良ビルドアップ係数の整備

2.1 対象とした物質と深さ

mfp 単位での透過距離が実際にどの程度の距離に相当するかは、線源エネルギーと遮蔽物質の種類によって異なるが、例えば、線源エネルギー 0.5MeV のガンマ線に対するコンクリートの場合、40mfp とは約 2 m に相当する。原子力発電所での被ばく線量評価では、この何倍もの深さでの計算が求められる。そこでビルドアップ係数データセットの整備は 300mfp まで行うこととした。

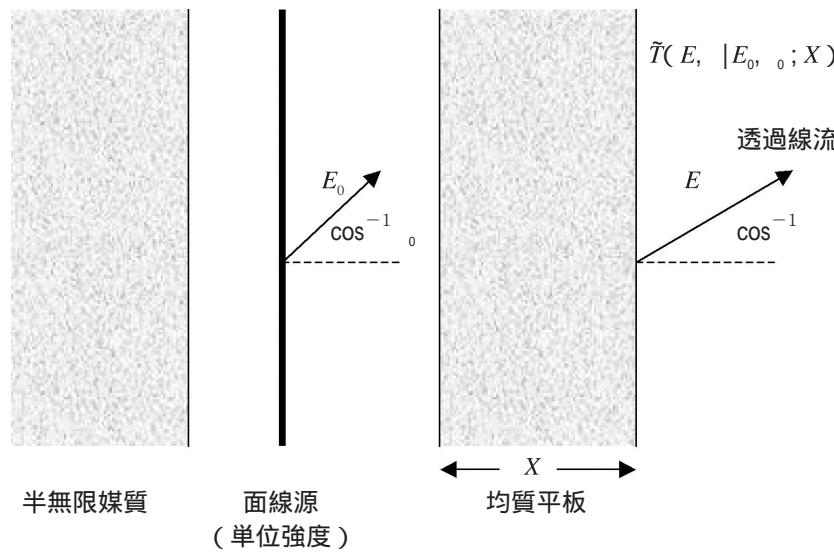
ANS 標準データの問題点を改善するため、最新の断面積データである PHOTX を統一的に使用し、現実的な制動輻射線のモデル⁽¹⁰⁾を導入して計算した。ビルドアップ係数は、無限均質媒質中の点等方線源に対するガンマ線照射線量ビルドアップ係数を計算した。計算対象は 26 物質（Be, B, C, N, O, Na, Mg, Al, Si, P, S, Ar, K, Fe, Cu, Rb, Mo, Sn, La, Gd, W, Pb, U, 水, コンクリート, 空気）を選択した。エネルギーは ANS 標準データと同じものを選択した（0.015 から 15.0MeV、但し U, Pb については 0.03 から 15.0MeV）。高 Z 核種では、K 端付近のエネルギーについても計算した。深さは 48 点（0.5, 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 15, 20, 25, 30, 35, 40, 45, 50, 55, 60, 65, 70, 75, 80, 90, 95, 100, 110, 120, 130, 140, 150, 160, 170, 180, 190, 200, 210, 220, 230, 240, 250, 260, 270, 280, 290,

表1 ビルドアップ係数データセットの比較

	ANSI/ANS データセット		改良ビルドアップ係数データセット	
深さ (mfp)	0.5 ~ 40mfp		0.5 ~ 300mfp	
	低 Z 核種 *	高 Z 核種 **	低 Z 核種 *	高 Z 核種 **
ガンマ線 断面積データ	NBS29	PHOTX	PHOTX	
制動輻射線の効果	なし	簡易モデル	現実的モデル	
計算法	モーメント法	PALLAS コード	IE 法	

* 低 Z 核種 : Be ~ Cu, 水, 空気およびコンクリート

** 高 Z 核種 : Mo ~ U

図1 修正透過関数 \tilde{T} の定義

300mfp)を選択した。角度分点数は15, エネルギー群数は95とした。表1にビルドアップ係数データセットの比較を示す。なお、制動輻射線の効果は、1.5MeV未満の領域では、0.5%未満とほぼ無視できることから、1.5MeV以上の領域で考慮した。

2.2 IE 法による計算方法の概要

IE 法は、遮蔽体における放射線の入出力関係だけに着目して計算する計算法で、IE 法独自の反射関数 $R(E, |E_0, \theta; X)$ と、修正透過関数 $\tilde{T}(E, |E_0, \theta; X)$ を計算し、光子の輸送計算を行う。修正透過関数は、図1に示すように、面線源、一定厚さ X の均質平板、および均質平板と同じ組成の半無限媒質が配置された体系で面線源からの放射線流が单一エネルギー E_0 、單一方向 θ_0 を持ち単位強度であるとき、平板外面に生じるエネルギー E 、方向 θ の透過線流強度を表す。反射関数および修正透過関数から得られる厚さ X に

関する微分方程式を初期の微小厚さ（例えば 2^{-9} mfp）だけ Runge-Kutta 法で数値的に解けば、後は修正透過関数の汎関数関係から、その2倍の厚さ (2^{-9} mfp の2倍, 2^{-8} mfp)について計算することが可能である。以後同様に厚さを2倍にしていくことで高速に深い距離まで計算することができる。面線源は点線源の集合であることから、無限均質媒質中の面等方線源による放射線束エネルギー分布から点等方線源によるビルドアップ係数が求められる。

IE 法は、モンテカルロ法と比較して、非常に高速に計算できるため、非常に深い透過距離まで輸送計算が可能である。また、計算結果の精度も独自の手法により評価可能となっている。これまでにビルドアップ係数の精度を評価したところ、100mfpまでは約 10% の誤差が含まれると評価されている⁽⁹⁾。

IE 法では、角度分点数に起因する影響を評価する角度分点誤差係数と、エネルギー群数に起因するエネルギー群誤差係数を近似計算し、ビルドアップ係

数の精度を評価する。角度分点誤差係数を $Ea(G,X)$ 、エネルギー群誤差係数を $Ee(N,X)$ とし、これらは次のように定義される。

$$Ea(G,X) = B(G,N;X)/B(\infty,N;X) \quad (1)$$

$$Ee(N,X) = B(G,N;X)/B(G,\infty;X) \quad (2)$$

ここで G は角度分点数、 N はエネルギー群数、 X は透過距離、 B はビルドアップ係数である。

G および N を無限大にとったときの値 $B(\infty,\infty;X)$ がビルドアップ係数の理論値であり、次の関係がある。

$$B(G,\infty;X) < B(\infty,\infty;X) < B(\infty,N;X) \quad (3)$$

$Ea(G,X)$ および $Ee(N,X)$ は近似的に求めることが可能で、計算結果を $Ea(G,X)$ および $Ee(N,X)$ と表すと、

$$Ea(G,X) < Ea(G,X) \quad (4)$$

$$Ee(N,X) > Ee(N,X) \quad (5)$$

の関係がある。これらより、次の関係があることが分かる。

$$\frac{B(G,N;X)}{Ee(N,X)} < B(\infty,\infty;X) < \frac{B(G,N;X)}{Ea(G,X)} \quad (6)$$

エネルギー群数 N および角度分点数 G によらない十分な数の分点数でビルドアップ係数の計算を行い、 $Ea(G,X)$ および $Ee(N,X)$ を計算することで、精度を評価することができる。

2.3 IE 法によるビルドアップ係数計算結果

IE 法による照射線量ビルドアップ係数（以下改良ビルドアップ係数という）の計算結果のうち、鉄、鉛、水、空気およびコンクリートの計算結果を表 2 から表 6 に示す。鉄、鉛、水、空気およびコンクリートについて、10MeV および 0.5MeV における ANS 標準データとの比較結果を図 2 に示す。10MeV における鉄、水、空気およびコンクリートのビルドアップ係数比が 1 を超えるのは、制動輻射線の効果を新たに含めたためである。また、10MeV における鉛のビルドアップ係数比が 1 を下回るのは、ANS 標準データが制動輻射線の効果を簡易モデルで考慮したことによる過大評価⁽¹⁵⁾が原因であると考えられる。

高 Z 核種について、ビルドアップ係数比 1 からの差違が大きい 15MeV における ANS 標準データとの比較結果を図 3 に示す。ANS 標準データと比較して、ランタンは、制動輻射線の過大評価によって最大約 3 倍のビルドアップ係数の過大評価をしていることが分かった。鉛について 1 MeV 以下における ANS 標準データとの比較結果を図 4 に示す。鉛の K 端付近の線源エネルギー 0.089～0.15MeV の範囲で、ANS 標準データは最大約 30% の過大評価をしていることが分かった。

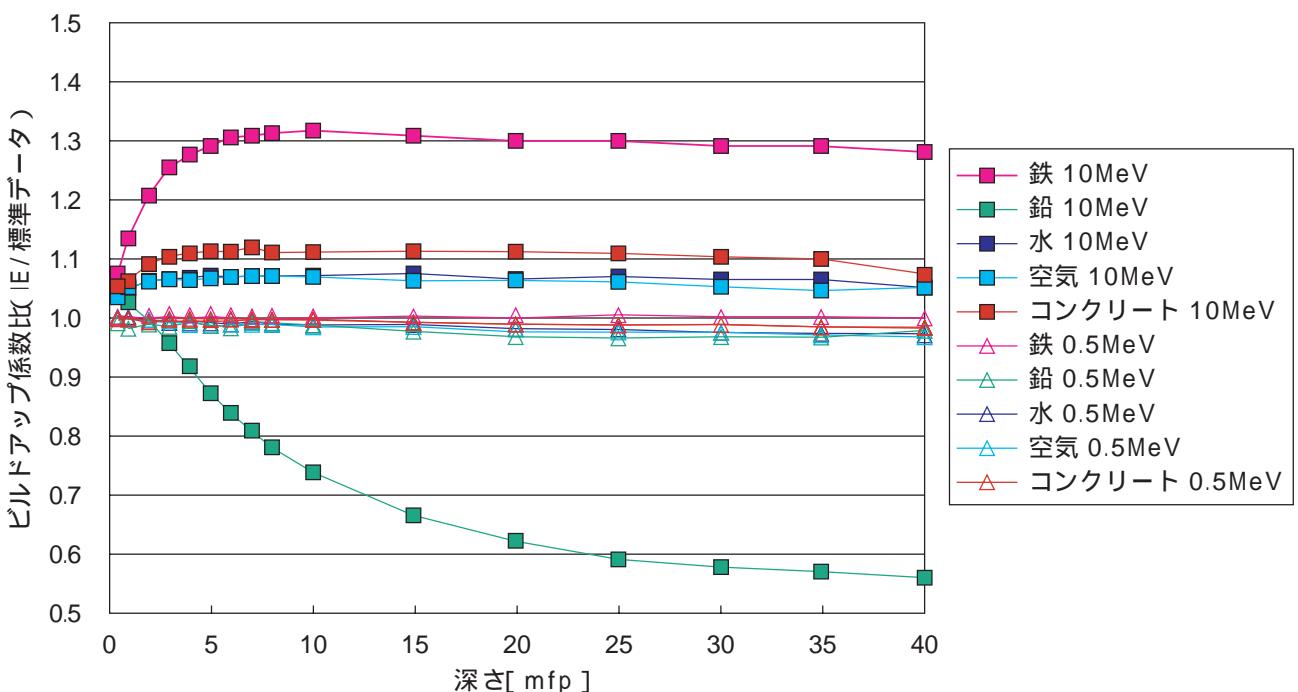


図 2 IE 法による改良ビルドアップ係数とANS標準データとの比
鉄 鉛 水 空気 コンクリート 線源エネルギー 10MeV 0.5MeV

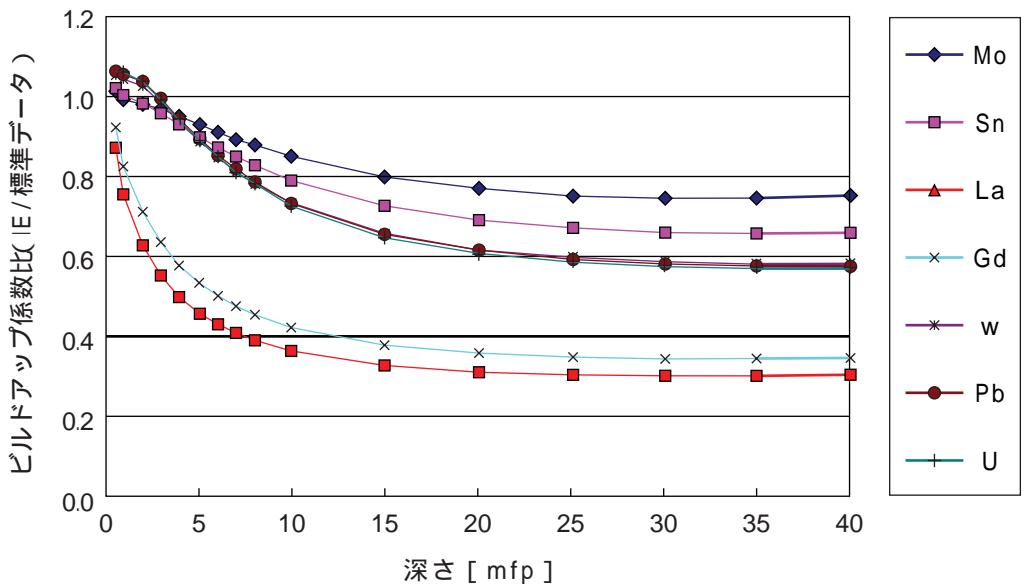


図3 IE法による改良ビルドアップ係数とANS標準データとの比
高Z核種 線源エネルギー15MeV

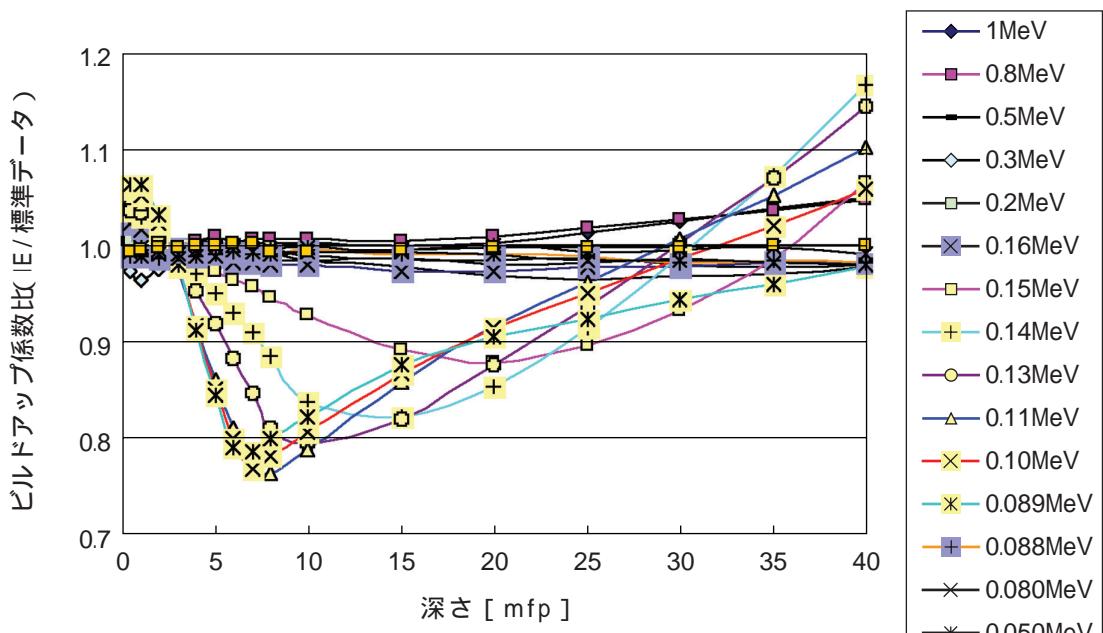


図4 IE法による改良ビルドアップ係数とANS標準データとの比
鉛 線源エネルギー1MeV以下

2.4 GP式フィッティングパラメータの算出

播磨らによって提案されたGP式⁽¹¹⁾は、線源エネルギーに依存するフィッティングパラメータを持つビルドアップ係数近似式であり、ビルドアップ係数の補間計算が高速で行える。フィッティング式は、以下のように線源エネルギーと透過距離からなる。

$$\begin{aligned} B(E,x) &= 1 + (b-1)(K^x - 1)/(K-1) \quad \text{for } K \neq 1 \\ B(E,x) &= 1 + (b-1)x \quad \text{for } K = 1 \\ K(E,x) &= cx^a + d[\tanh(x/X_k - 2) - \tanh(-2)] \\ &\quad / [1 - \tanh(-2)] \end{aligned}$$

E : 線源エネルギー (MeV)

x : 透過距離 (mfp)

b : 1 mfp でのビルドアップ係数

a, c, d, X_k : フィッティングパラメータ

められた。線源エネルギーが 0.05 ~ 1 MeV の範囲において大きな差違が見られた。今後、100mfp 以上の深い距離に対応できるフィッティングパラメータの算出および外挿式についての検討が必要であると考えられる。

従来、フィッティングパラメータは、ANS 標準データを利用して得られていた。また、40mfp 以上の深さでは 35mfp と 40mfp でのフィッティングパラメータと外挿式⁽²¹⁾からビルドアップ係数を算出していったが、60mfp までの上限が設定されていた⁽⁴⁾。

本研究で IE 法による改良ビルドアップ係数が得られたことから、0 ~ 100mfp を対象として GP 式のフィッティングパラメータを算出し直した（以下新フィッティングパラメータという）。鉄、鉛、水、空気およびコンクリートに対する新フィッティングパラメータを表 7 から表 11 に示す。100 ~ 300mfp のビルドアップ係数については、95mfp と 100mfp でのフィッティングパラメータと外挿式から算出するようにし、60mfp の上限を 300mfp までに修正した。

新フィッティングパラメータを用いた GP 式で算出したビルドアップ係数と、IE 法による改良ビルドアップ係数との比較を、26 物質全てに対して実施した。その内、鉄、鉛、水、空気およびコンクリートについて、透過距離 10, 50, 100, 150, 200, 250, 300mfp の比較結果を図 5 から図 9 に示す。水、空気およびコンクリートでは 100mfp 以上で大きな差違が認められた。鉄では 100mfp までは良い一致が認められたが、150mfp 以上では 0.3 MeV 以上で大きな差違が認められた。鉛では K 端付近で大きな差違が認められた。全体的に、低 Z 核種でも比較的軽い核種において、フィッティング範囲の 0 ~ 100mfp の間でも少し差違が認められた。また 100mfp までの間は、比較的良好く一致していたが、100mfp を超えると透過距離が大きくなるにつれて差違が大きくなる傾向が認

表9 GP式新フィッティングパラメータ
媒質:水, レスポンス:空気

$E(\text{MeV})$	b	c	a	Xk	d	Max.Dev.	x_{\max}	$St.Dev.$
0.015	1.160	0.595	0.063	6.97	0.0678	1.70%	0.5	0.634%
0.020	1.384	0.645	0.061	6.96	0.0614	2.80%	0.5	1.160%
0.030	2.172	0.847	0.024	8.29	0.0407	4.57%	0.5	1.893%
0.040	3.417	1.085	-0.012	20.73	-0.0023	0.55%	25.0	0.258%
0.050	4.584	1.333	-0.055	35.00	0.0214	5.44%	0.5	2.423%
0.060	5.421	1.435	-0.050	8.14	-0.0676	12.93%	0.5	5.738%
0.080	5.675	1.604	-0.063	8.04	-0.1066	18.20%	0.5	8.352%
0.100	5.304	1.679	-0.069	8.20	-0.1190	19.73%	0.5	9.328%
0.150	4.313	1.727	-0.074	8.28	-0.1255	16.63%	100.0	9.609%
0.200	3.799	1.683	-0.072	8.68	-0.1142	15.63%	100.0	9.243%
0.300	3.298	1.568	-0.064	9.32	-0.0906	15.72%	1.0	8.219%
0.400	2.994	1.476	-0.056	9.81	-0.0761	14.71%	1.0	7.308%
0.500	2.787	1.407	-0.049	9.99	-0.0673	13.76%	1.0	6.458%
0.600	2.638	1.356	-0.044	10.14	-0.0587	12.74%	1.0	5.724%
0.800	2.407	1.284	-0.036	10.04	-0.0489	9.91%	1.0	4.566%
1.000	2.202	1.315	-0.058	35.00	0.0307	5.87%	1.0	2.696%
1.500	2.009	1.190	-0.037	34.43	0.0197	4.18%	0.5	1.684%
2.000	1.876	1.124	-0.025	34.66	0.0135	2.40%	0.5	0.987%
3.000	1.727	1.043	-0.009	35.75	0.0055	0.78%	2.0	0.397%
4.000	1.636	0.992	0.002	19.17	-0.0013	0.97%	2.0	0.297%
5.000	1.572	0.960	0.009	30.18	-0.0044	1.75%	1.0	0.558%
6.000	1.528	0.935	0.015	31.43	-0.0084	2.05%	1.0	0.807%
8.000	1.447	0.914	0.020	32.78	-0.0115	2.89%	1.0	0.999%
10.000	1.392	0.908	0.021	33.55	-0.0108	3.33%	1.0	1.124%
15.000	1.323	0.886	0.027	33.94	-0.0156	3.54%	0.5	1.329%

表10 GP式新フィッティングパラメータ
媒質:空気, レスポンス:空気

$E(\text{MeV})$	b	c	a	Xk	d	Max.Dev.	x_{\max}	$St.Dev.$
0.015	1.148	0.587	0.065	6.47	0.0675	1.56%	0.5	0.604%
0.020	1.348	0.643	0.061	7.19	0.0588	3.12%	0.5	1.133%
0.030	2.070	0.825	0.028	8.18	0.0433	4.98%	0.5	1.910%
0.040	3.205	1.048	-0.005	29.08	-0.0048	1.28%	0.5	0.496%
0.050	4.369	1.278	-0.046	35.36	0.0159	4.90%	0.5	1.797%
0.060	5.170	1.387	-0.046	8.48	-0.0551	12.01%	0.5	4.958%
0.080	5.475	1.559	-0.060	8.22	-0.0941	17.18%	0.5	7.649%
0.100	5.122	1.646	-0.067	8.16	-0.1101	17.98%	0.5	8.660%
0.150	4.259	1.691	-0.072	8.42	-0.1138	16.35%	0.5	9.029%
0.200	3.809	1.643	-0.070	9.09	-0.0985	16.13%	1.0	8.694%
0.300	3.235	1.555	-0.063	9.35	-0.0872	14.31%	1.0	7.835%
0.400	2.959	1.464	-0.055	9.94	-0.0725	14.25%	1.0	6.981%
0.500	2.744	1.404	-0.049	9.98	-0.0654	12.46%	1.0	6.175%
0.600	2.581	1.358	-0.044	9.91	-0.0607	10.77%	1.0	5.514%
0.800	2.413	1.272	-0.035	10.60	-0.0439	10.69%	1.0	4.403%
1.000	2.193	1.305	-0.056	35.00	0.0285	5.52%	0.5	2.524%
1.500	1.997	1.189	-0.037	34.36	0.0194	3.79%	0.5	1.531%
2.000	1.874	1.120	-0.024	35.00	0.0124	2.36%	0.5	0.963%
3.000	1.738	1.035	-0.007	38.59	0.0038	1.14%	0.5	0.300%
4.000	1.644	0.985	0.004	26.67	-0.0033	0.87%	20.0	0.408%
5.000	1.570	0.965	0.008	29.98	-0.0042	1.87%	1.0	0.592%
6.000	1.521	0.947	0.012	31.56	-0.0061	2.50%	1.0	0.811%
8.000	1.448	0.922	0.018	33.10	-0.0099	2.82%	1.0	1.018%
10.000	1.393	0.913	0.020	34.78	-0.0112	3.26%	1.0	1.170%
15.000	1.313	0.904	0.023	33.70	-0.0138	4.04%	0.5	1.282%

表11 GP式新フィッティングパラメータ
媒質：コンクリート，レスポンス：空気

$E(\text{MeV})$	b	c	a	Xk	d	Max.Dev.	x_{\max}	$St.Dev.$
0.015	1.026	0.530	0.071	5.00	0.0768	0.59%	20.0	0.332%
0.020	1.057	0.581	0.062	7.90	0.0556	0.71%	0.5	0.285%
0.030	1.194	0.544	0.079	5.90	0.0766	1.51%	0.5	0.746%
0.040	1.418	0.612	0.069	6.52	0.0707	3.36%	0.5	1.234%
0.050	1.711	0.707	0.050	6.97	0.0637	4.84%	0.5	1.868%
0.060	2.011	0.815	0.028	7.23	0.0541	5.32%	0.5	2.135%
0.080	2.445	0.977	0.010	30.49	-0.0141	4.53%	0.5	1.721%
0.100	2.688	1.126	-0.018	21.09	-0.0057	2.87%	0.5	0.981%
0.150	2.833	1.316	-0.051	39.34	0.0153	1.06%	15.0	0.607%
0.200	2.833	1.328	-0.044	12.86	-0.0239	4.73%	100.0	2.419%
0.300	2.674	1.348	-0.046	12.13	-0.0311	6.11%	1.0	3.078%
0.400	2.515	1.333	-0.044	11.78	-0.0345	6.12%	1.0	3.284%
0.500	2.421	1.300	-0.040	12.18	-0.0328	6.65%	1.0	3.250%
0.600	2.338	1.335	-0.057	37.95	0.0221	6.76%	1.0	2.556%
0.800	2.123	1.319	-0.057	35.00	0.0267	3.10%	85.0	1.730%
1.000	2.038	1.267	-0.049	35.43	0.0233	2.41%	1.0	1.445%
1.500	1.895	1.180	-0.035	34.52	0.0176	1.88%	1.0	1.091%
2.000	1.818	1.112	-0.022	35.00	0.0102	1.56%	1.0	0.731%
3.000	1.684	1.055	-0.011	37.31	0.0053	0.94%	1.0	0.358%
4.000	1.610	1.012	-0.002	20.00	0.0000	1.23%	1.0	0.615%
5.000	1.542	0.991	0.003	27.23	-0.0037	2.41%	1.0	0.763%
6.000	1.501	0.974	0.007	30.75	-0.0060	3.16%	1.0	1.015%
8.000	1.439	0.951	0.013	32.20	-0.0109	3.42%	1.0	1.255%
10.000	1.391	0.941	0.016	32.36	-0.0135	4.08%	0.5	1.397%
15.000	1.335	0.931	0.020	33.48	-0.0179	4.01%	0.5	1.534%

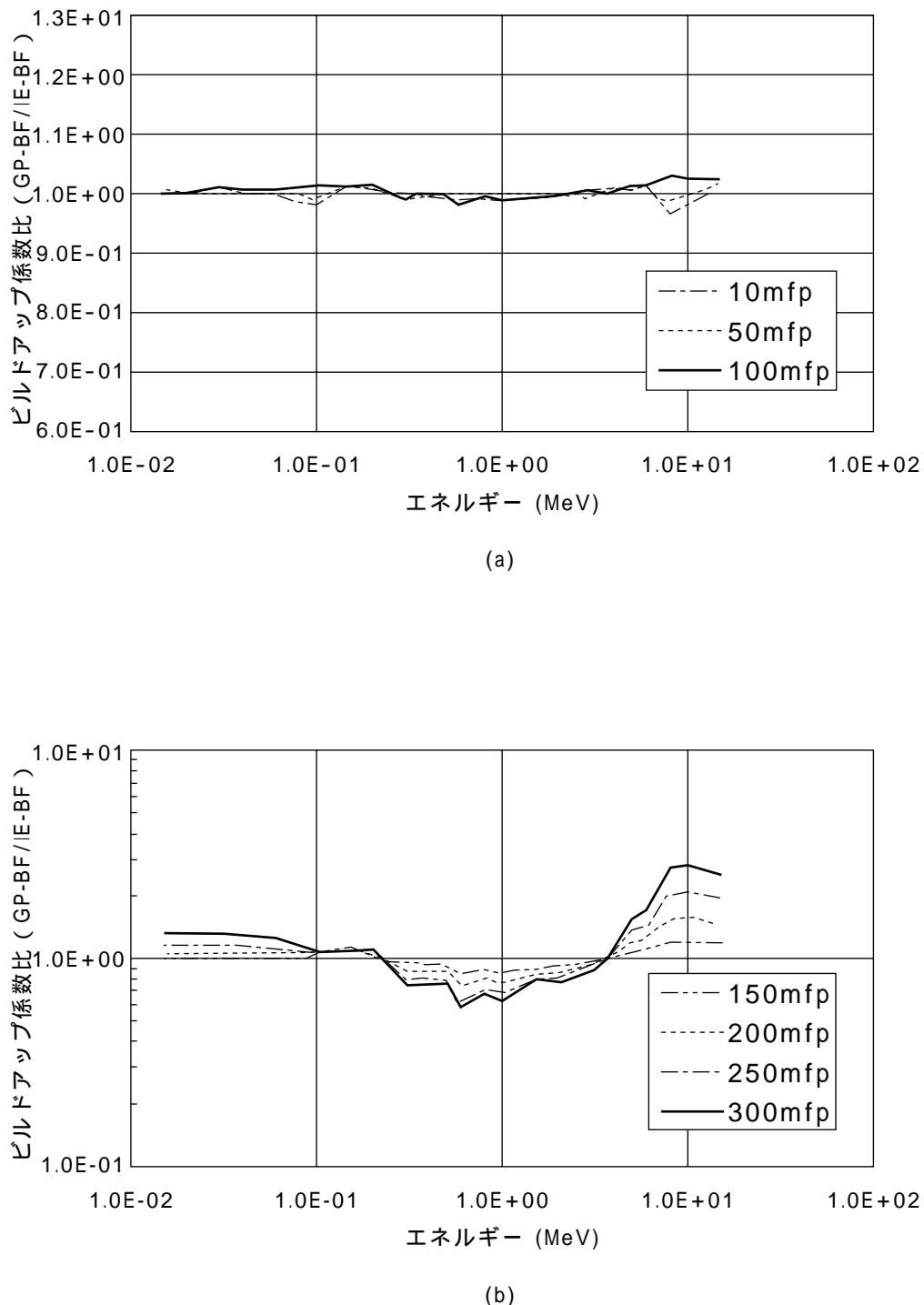


図5 新フィッティングパラメータを用いたGP式で算出したビルドアップ係数(GP-BF)とIE法による改良ビルドアップ係数(IE-BF)との比(鉄)
(a): 10~100mfp, (b): 150~300mfp

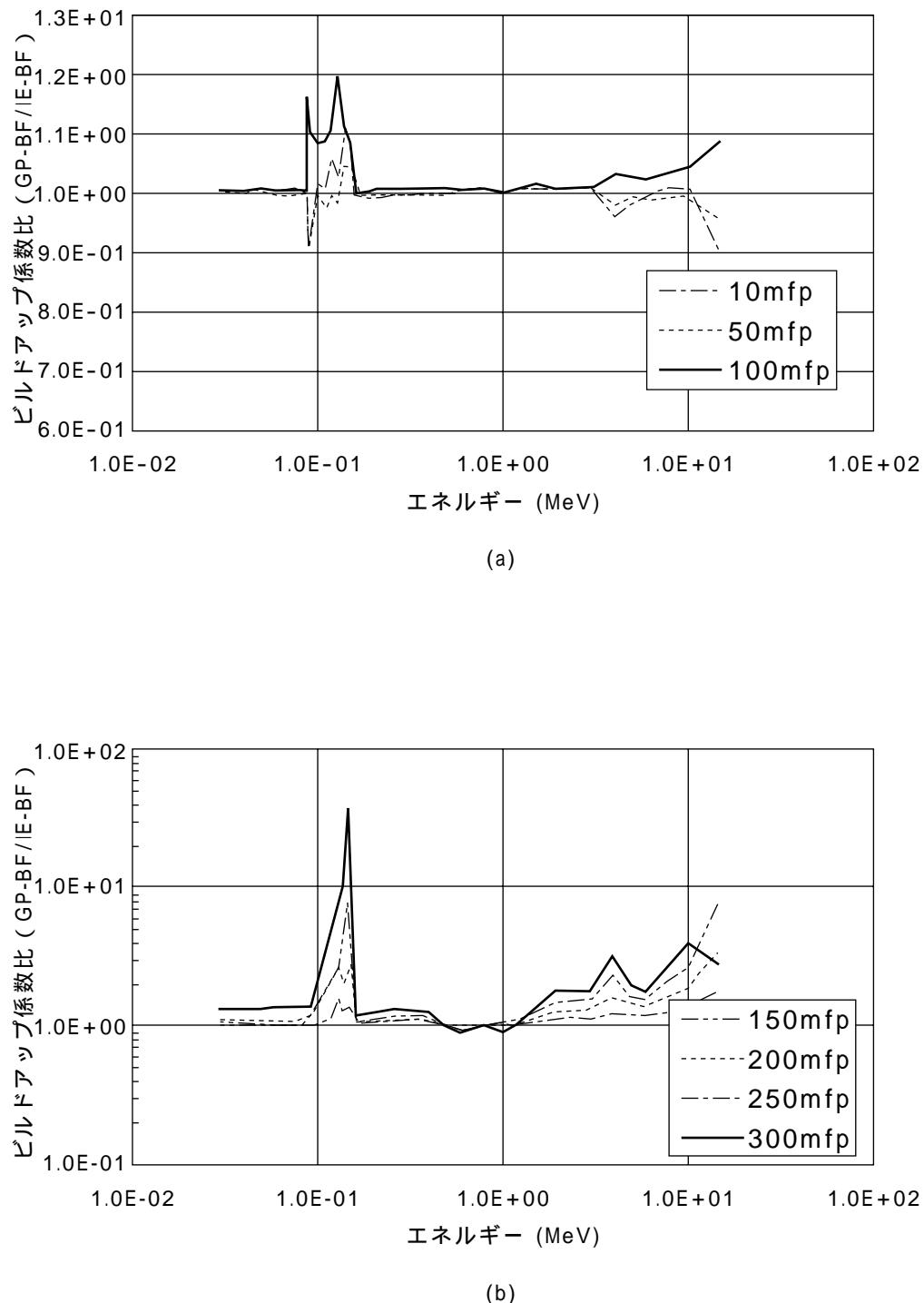


図 6 新フィッティングパラメータを用いたGP式で算出したビルドアップ係数(GP-BF)とIE法による改良ビルドアップ係数(IE-BF)との比(鉛)
(a) : 10~100mfp , (b) : 150~300mfp

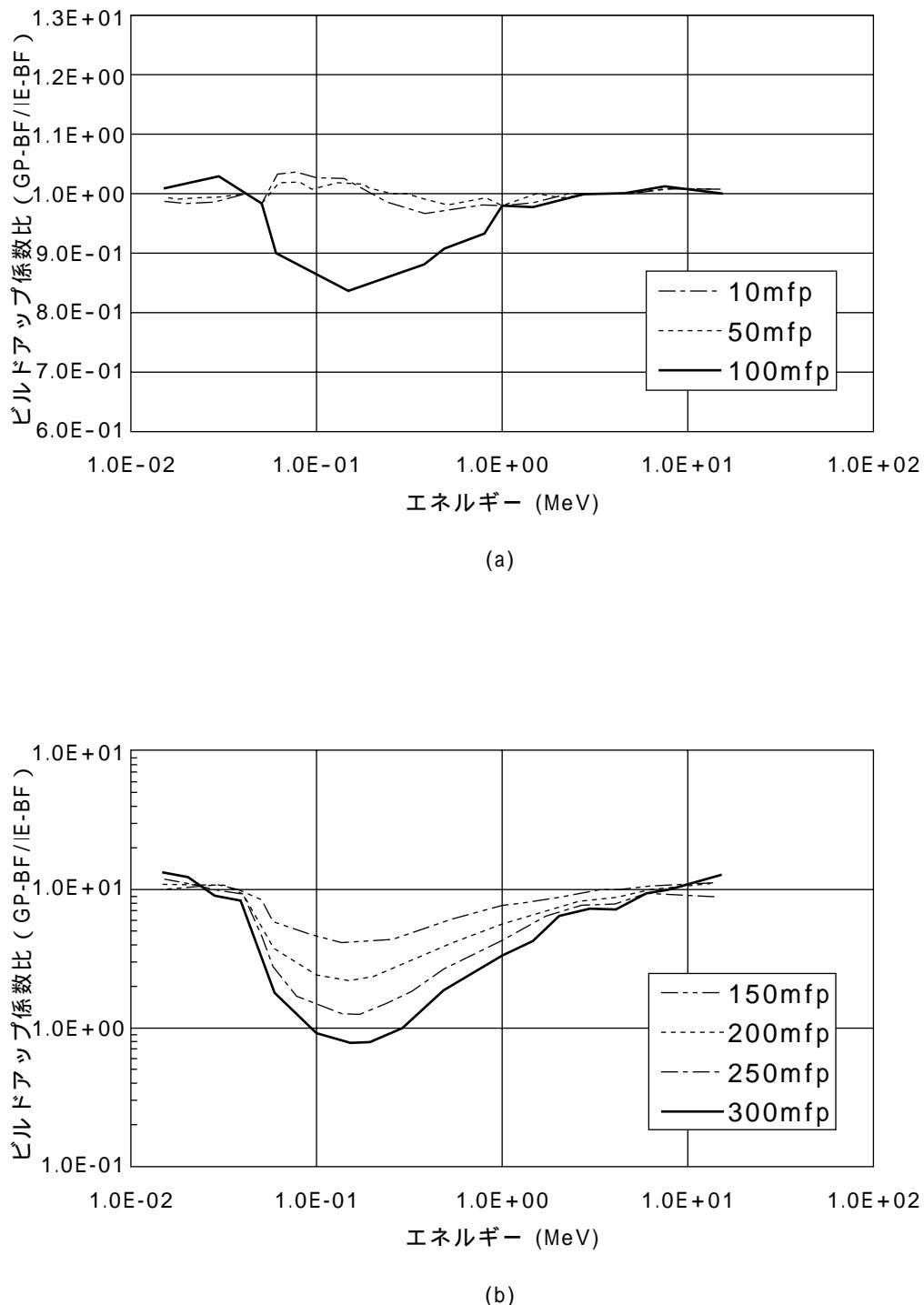


図 7 新フィッティングパラメータを用いたGP式で算出したビルドアップ係数(GP-BF)とIE法による改良ビルドアップ係数(IE-BF)との比(水)
(a): 10~100mfp, (b): 150~300mfp

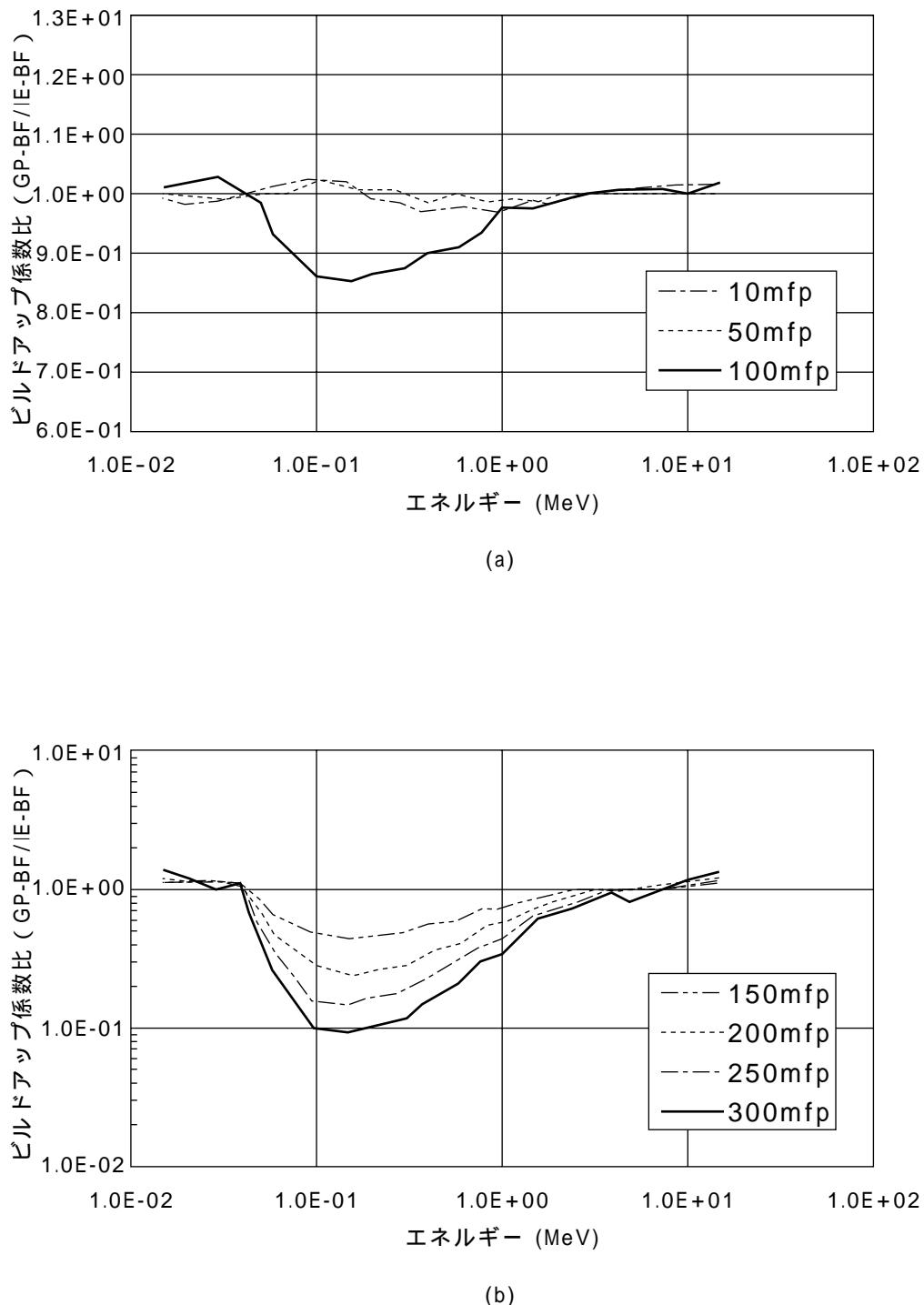


図 8 新フィッティングパラメータを用いたGP式で算出したビルドアップ係数(GP-BF)とIE法による改良ビルドアップ係数(IE-BF)との比(空気)
(a) : 10~100mfp , (b) : 150~300mfp

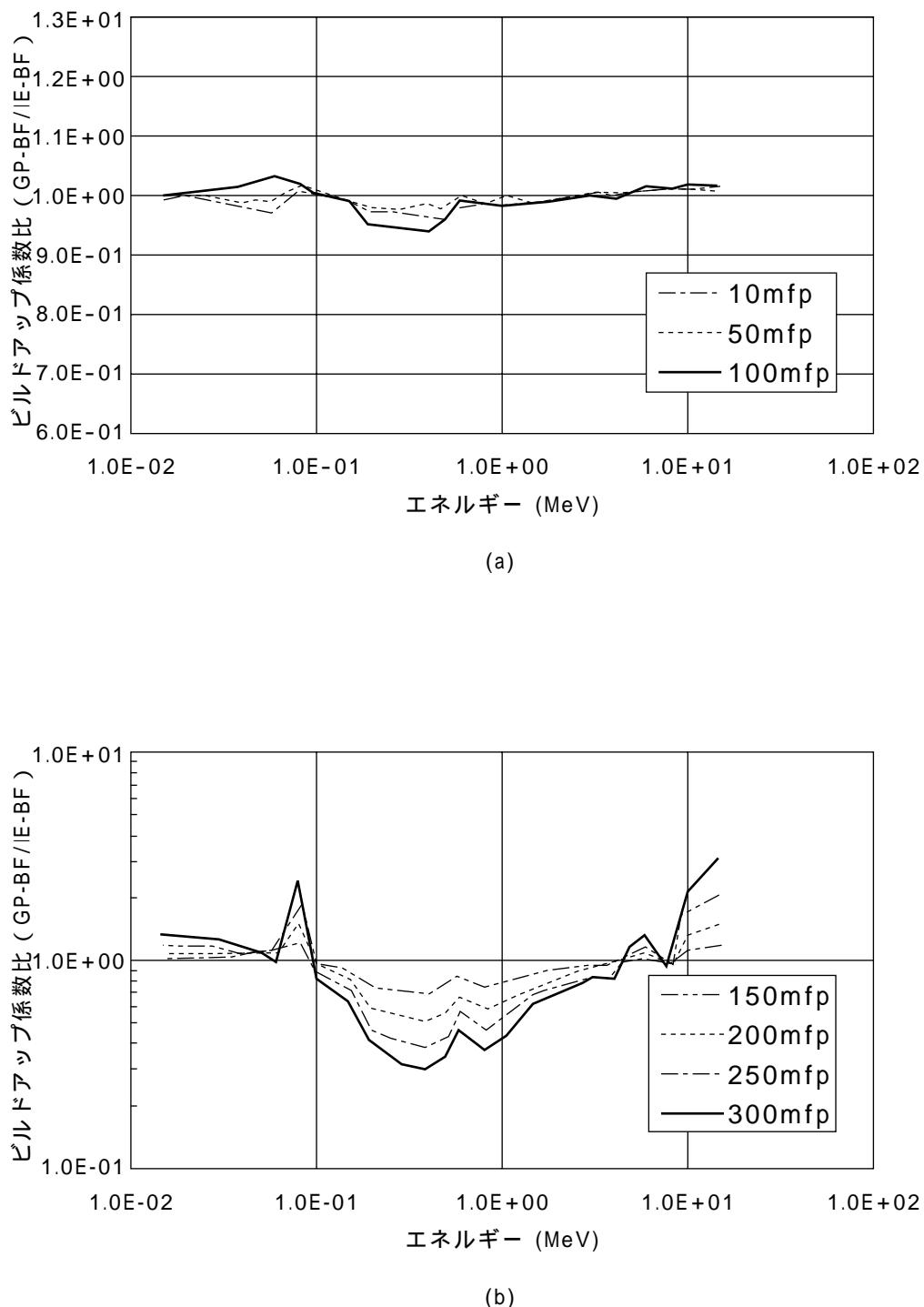


図9 新フィッティングパラメータを用いたGP式で算出したビルドアップ係数(GP-BF)とIE法による改良ビルドアップ係数(IE-BF)との比(コンクリート)
(a): 10~100mfp, (b): 150~300mfp

2.5 コードへの組み込み

改良ビルドアップ係数のQADコードおよびG33コードへの組み込みは、1)物質毎に線源エネルギーとmfpの2次元テーブルでビルドアップ係数を格納するファイルを組み込み、Lagrangeの3点補間で内挿してビルドアップ係数を取り出す方法、2)これまでのように、GP式のフィッティングパラメータを格納するファイルを組み込み、GP式でビルドアップ係数を算出する方法、の2通りで行った。入力ファイルによって2通りを使い分けることができるようとした。これは、2.4節で示したように、GP式によるビルドアップ係数と改良ビルドアップ係数との差違が大きい場合があるためである。

3.まとめ

まず、深い透過距離での遮蔽計算に対応するため、最新断面積データ、制動輻射線の現実的なモデルを用いて実用上十分と考えられる300mfpまでの照射線量ビルドアップ係数の整備をIE法で行った。ANS標準データとの比較の結果、ANS標準データの過大評価を最大約1/3(ランタン10MeVの場合)にまで修正し、K端付近でのビルドアップ係数が約30%(鉛の場合)修正されたことが分かった。300mfpでは誤差1桁となるが、300mfpになると非散乱成分は $e^{-300} \approx 10^{-131}$ となるため、十分な精度を有していると考えられる。

次に、得られた改良ビルドアップ係数から300mfpまでの新GPフィッティングパラメータを算出した。GP式でビルドアップ係数を計算した結果、改良ビルドアップ係数とGP式で計算したビルドアップ係数との間に大きな差違が発生し、特に100mfp以上で差違が大きいことが分かった。

改良ビルドアップ係数を活用するため、改良ビルドアップ係数および新GPフィッティングパラメータをQADコード、G33コードに導入し、これまでにない深い透過距離での遮蔽計算を可能とした。

今後は、実効線量ビルドアップ係数および吸収線量ビルドアップ係数を整備し、改良版QADコードおよびG33コードとして一般に公開するとともに、線量評価システムに導入する予定である。また、今後100mfpを超える領域でのGP式のフィッティングパラメータ導出および外挿式について検討を行う予定である。

文献

- (1) 吉田至孝、入江隆、郡山民男、工藤清一、西村和哉，“シビアアクシデント時の発電所内被ばく線量評価手法の検討”，INSS Journal, Vol.8, 174-185(2001).
- (2) 吉田至孝、入江隆、郡山民男、工藤清一、西村和哉，“シビアアクシデント時従業員被ばく線量評価手法の検討”，日本原子力学会和文論文誌，Vol.1, 85-95(2002).
- (3) 恩田隆司、吉田至孝、工藤清一、西村和哉，“シビアアクシデント時の発電所内線量評価手法の改良”，INSS Journal, Vol.10, 241-249(2003).
- (4) Y.Sakamoto, S.Tanaka, “QAD-CGGP2 AND G33-GP2 : REVISED VERSIONS OF QAD-CGGP AND G33-GP”, JAERI-M 90-110, Japan Atomic Energy Research Institute, (1990).
- (5) 三菱原子力工業株式会社, SPANコードの概要 MAPI-1049 改2, (1992)
- (6) 三菱原子力工業株式会社, SCATTERING コードの概要 MAPI-1021 改6, (1992)
- (7) American National Standard, *Gamma-Ray Attenuation Coefficients and Buildup Factors for Engineering Materials*, ANSI/ANS-6.4.3, (1991).
- (8) O. Chibani, “New Photon Exposure Buildup Factors”, *Nucl. Sci. Engng.*, 137, 215 (2001).
- (9) A. Shimizu, “Calculation of Gamma-Ray Buildup Factors up to Depths of 100 mfp by the Method of Invariant Embedding, (I),” *J. Nucl. Sci. Technol.*, 39, 477 (2002).
- (10) A. Shimizu, H. Hirayama, “Calculation of Gamma-Ray Buildup Factors up to Depths of 100 mfp by the Method of Invariant Embedding, (II),” *J. Nucl. Sci. Technol.*, 40, 192 (2003).
- (11) Y. Harima et al., ”Validity of the Geometrical Progression Formula in Approximating Gamma-Ray Buildup Factors”, *Nucl. Sci. Engng.* 94, 24(1986).
- (12) J. H. Hubbell, *Photon Cross Sections, Attenuation Coefficients and Energy Absorption Coefficients from 10 keV to 100 GeV*, NSRDS-NBS29, (1969).
- (13) Radiation Shielding Information Center Data Package DLC-136/PHOTX, contributed by Natl.Inst.of Standards and Technol.
- (14) K. Takeuchi, S. Tanaka, *PALLAS-ID (VII); A Code for Direct Integration of Transport Equation in One*

Dimensional Plane and Spherical Geometries,
JAERI-M84-214, (1984).

- (15) H. Hirayama, " Calculation of Gamma-ray Exposure Buildup Factors up to 40 mfp Using the EGS4 Monte Carlo Code with a Particle Splitting ", *J. Nucl. Sci. Technol.*, 32, 1207 (1995).
- (16) A. Shimizu, H. Mizuta, " Application of Invariant Embedding to the Reflection and Transmission Problem of Gamma Rays (I) ", *J. Nucl. Sci. Technol.*, 3, 57 (1966).
- (17) A. Shimizu, H. Mizuta, " Application of Invariant Embedding to the Reflection and Transmission Problem of Gamma Rays (II) ", *J. Nucl. Sci. Technol.*, 3, 441 (1966).
- (18) A. Shimizu, " Calculation of the Penetration of Gamma Rays through Slabs by the Method of Invariant Embedding ", *Nucl. Sci. Engng.*, 32, 385 (1968).
- (19) A. Shimizu, K. Aoki, *Application of Invariant Embedding to Reactor Physics*, Academic Press, (1972).
- (20) A. Shimizu, " Development of Angular Eigenvalue method for Radiation Transport problems in Slabs and Its Application to Penetration of Gamma Rays ", *J. Nucl. Sci. Technol.*, 37, 15 (2000).
- (21) Y. Harima et al., " Gamma-Ray Attenuation in the Vicinity of the K Edge in Molybdenum, Tin, Lanthanum, Gadolinium, Tungsten, Lead and Uranium ", *Nucl. Sci. Engng.* 107, 385(1991b).